

令和6年産 コメ通信

第2号（令和6年4月4日）

【発行】

北秋田地域振興局農林部農業振興普及課
（電話：0186-62-1835）

高温に注意！健康な苗作りを！

1 適切な種子予措

暖かい日が続く予報となっているので、芽を伸ばし過ぎることのないよう、浸種や催芽の注意点を再確認しましょう。また、ばか苗病等の病害を万全に防除しましょう。

【薬剤消毒・浸種・催芽】

- 防除効果を安定させるため、浸漬法による種子消毒時及び浸種時の水温は、10~15℃を確保できるように努めます。
- 浸種の水量は、種子容量の2倍程度（種もみ1kg当たり水量3.5L）とします。
- 浸種開始から2日間は水の交換はしません。浸種期間は水温10℃で6~8日、14℃で6日程度とし、種子消毒剤の薬効を確保するため、水交換は2~3回とします。
- 催芽の際、芽を伸ばし過ぎると播きムラにつながるため、ハト胸程度にします。
- 複数の品種や消毒方法の異なる種子を、同じ容器で同時に浸種・催芽を行うことは避けてください。

【環境衛生】

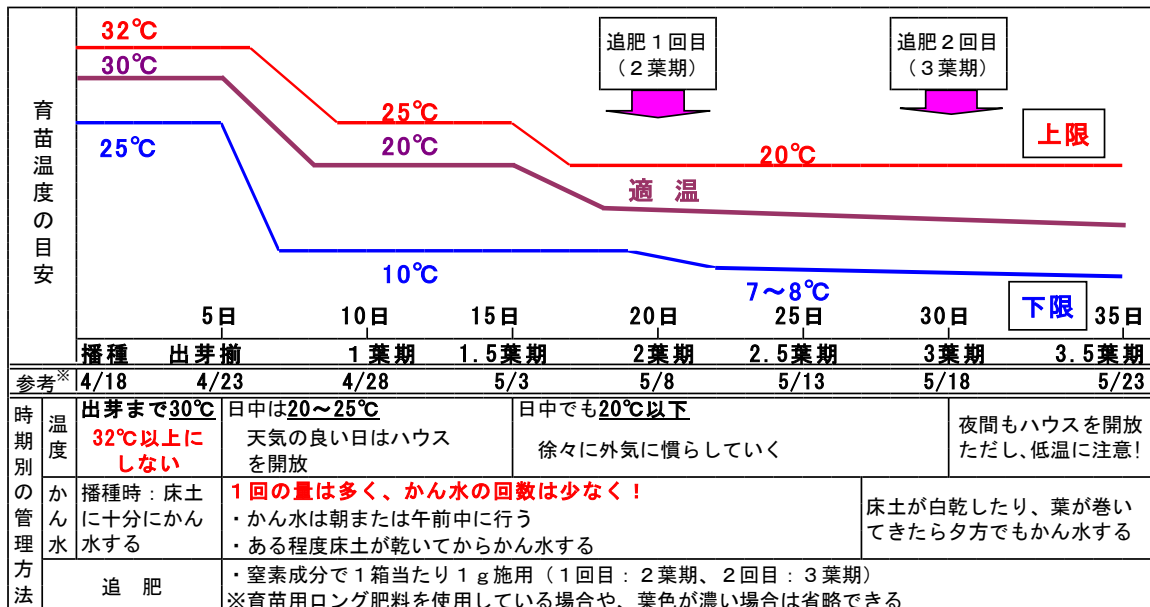
- 周辺からの病原菌の侵入を防ぐため、種子予措を行う作業場所やその周辺を十分に清掃し、浸種・催芽時は容器にふたをしましょう。
- 種子予措に使う容器等は、使用前に加え品種や消毒方法が変わるごとに洗浄します。

2 育苗期間の管理

出芽後の温度管理は、苗の生育や田植え時の苗質に大きく影響します。また、育苗中の急激な温度変化は、病害や生育障害の発生を助長します。今後1か月の平均気温は高い確率70%（仙台管区气象台；4月4日発表）との予報が出ていますので、ハウス内の温度管理に注意し、充実した苗づくりに努めてください。

【管理のポイント】中苗の場合

参考*は、平年の播種盛期を当てはめたもの。



- 出芽長は、0.5 cm程度を目標とします。伸ばしすぎると、その後の葉数展開が遅れ、徒長気味の苗になるため注意します。
- 出芽揃い後は速やかに被覆資材を除去します。出芽後の再被覆はもみ枯細菌病等の発生を助長するため、行いません。
- 通気管理は通常1葉期頃から行い、1.5葉期以降は徐々に外気へ慣らします。移植1週間前頃からは、低温日でない限り夜間もハウスを開放して外気に当て、硬い苗に育てます。
- 追肥を行う場合は、窒素成分で箱当たり1g（2葉期と3葉期頃）施用します。追肥した後は、かん水して苗に付着した肥料を洗い流します（注：ロング入り肥料の場合は追肥不要です）。

3 いもち病の防除対策

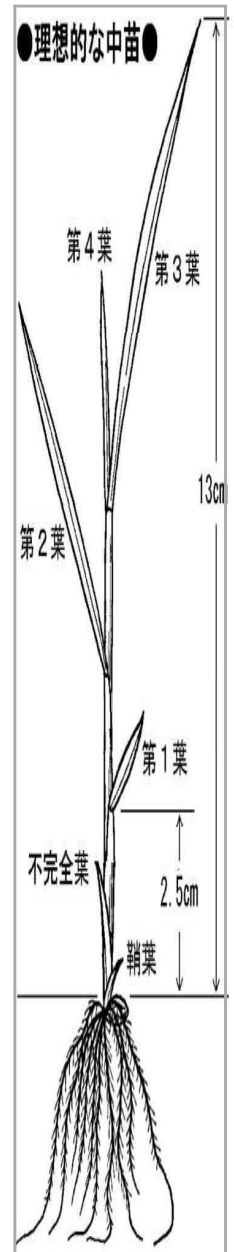
育苗期のいもち病防除は、本田での発病を防ぐ基本です。育苗ハウスやその周辺の稲わら・もみ殻を撤去し、表1を参考に苗いもちや葉いもち防除を適正に行うことで、穂いもちの被害を未然に防ぐことができます。育苗箱施用剤では育苗期に発生するいもち病を防ぐことはできません。なお、ベンレート水和剤の播種時処理は、種子消毒に使用するタブブロックまたはエコホープD J（生物農薬）の防除効果を低下させるため、体系処理は行いません。

表1. 育苗期のいもち防除剤(苗いもち防除)

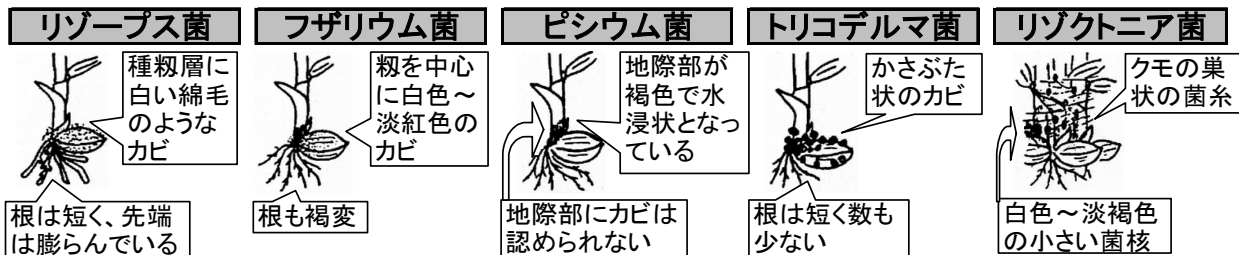
薬剤名	処理時期	希釈倍数・散布量
ベンレート水和剤	播種時～播種14日後(かん注)	500倍 500 mL/箱
	播種時～播種7日後頃(かん注)	1,000倍 1,000 mL/箱
ビームゾル	緑化始期(かん注)	500倍 500 mL/箱

4 苗立枯病の防除対策

- 耕種的防除対策として、清潔な資材を使用するなど、育苗施設の衛生を保ち、栽培基準に基づいた適切な温度管理と水管理を行います。
- 苗立枯病菌は数種あり、種類によって防除薬剤が異なるため注意してください。
- リゾプス菌に対しては発芽後の薬剤防除は効果が劣るため、ハウス内の高温に注意し、ベタ張りを長期間行わないようにしてください。



〈縦方向：実寸大〉



春の農作業安全確認運動期間（令和6年3月1日から5月31日まで）

毎年、農作業中の事故により多くの方が亡くなっています。特に、農繁期となるこの時期は事故が多くなります。忙しい時こそ安全確認を徹底し、家族や従業員とも日頃から予防対策を考えましょう。

問い合わせはJAまたは農業振興普及課まで ～次回発行は5月上旬頃～